論文

北斎と「菊花」―「野人対瓶花」に込めた思い

舟橋 萌絵*

序

江戸時代後期に活躍した浮世絵師・葛飾北斎（1760［宝暦 10］年~1849［嘉永 2］年）(1)は、絵に捧げる一生を貫き通し、多彩な作品を遺した天才絵師である。代表作『北斎漫画』などの絵手本や、川柳、絵暦といった様々なジャンルを手がけてたくさんの経験を積み、才能を開花させていった。また、浮世絵（錦絵）の代表作「富嶽三十六景」(2)などの風景画や役者絵、美人画、花鳥画、風俗画など多くの題材に目を向けて、狩野派・琳派・洋風画の画法を広く学び、一つの世界に留まることなく様々な作品を完成させた。

北斎は絵に専心した 70 年もの間、才気溢れるあらゆる作品を描いてきたが、その中でも「浮世絵」の一ジャンルである「花鳥画」を版画・肉筆画ともに多く遺している。

「花鳥画」の主題の一つである花の中でも北斎が特に親しみを込めて描き、他の花よりも好んで多く作品として遺しているのは「菊花」である。先に述べた通り、北斎は数々の作品を 70 年もの長い間、描き続けてきたのだが、「菊花」を描いた作品に関していうと、北斎が「絵手本」や「浮世絵版画」を多く描いていたとされる 50 歳前後から、「肉筆画」を多く手がけた 70 歳~80 歳前後にかけて制作を行っている。「菊花」が、どの花よりも長い年月をかけて多く描かれていることを考えると、北斎は、「菊花」の図にある強い思いを込めて作成したのであろうと推察される。また、主に「菊花」を主題として描き、他の花に比べて「菊花」を多く描いている絵師は北斎だけであり、北斎が初と

* 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期

いって過言ではない。

「菊花」は、江戸時代を通して最も愛好され、流行した花であった。「菊花」は、江戸の庶民が園芸として楽しみ、「菊人形」のように見て楽しむもの・観賞用としても親しまれてきたが、「菊花」には「花の美しさ」を賞美する目的のものだけではなく、当時甚だ勝れた特別な力があり、その偉大さにより更に人々を引きつけていたと言われている。中国漢代から伝わる「菊慈童(3)」という伝承によると、「甘谷という谷にある菊水(4)で、菊がたわわに咲いて、その露がおちた水を飲むと、「不老長寿」になる」と言われている。こうした伝承が日本に仁徳天皇の時代、伝わったとされている。以上のことから「菊花」は「不老長寿」の象徴であり、縁起の良い、「幸せ」の象徴・花として親しまれてきたと考えられている(5)。長生きをして絵を描き続けることを望んだ北斎にとって「不老長寿」は、北斎の願望であった。

北斎にとって「菊花」とはどういうものだったのかという視点からの研究論文は、私の知る限り一つもない(6)。永田生慈『アート・ビギナーズ・コレクション　もっと知りたい葛飾北斎　生涯と作品』、北斎の代表的な研究雑誌である『北斎研究』(墨田区文化復興財団)にも、「不老長寿」・「菊花」と北斎について少しも指摘されておらず、先行研究がないのである。

本稿では、「不老長寿」という優れた力をもつ「菊花」を論じ、長命であることに強いこだわりを持っていた北斎の、「不老長寿」に対する思いについて、作例を挙げながら考察する。そして、北斎が多くの傑作を遺している絵画・浮世絵の一ジャンル、「花鳥画」の中でも北斎の願いであったと考えられる「不老長寿」の思いを「老人」と「菊花」に込めた、北斎の力作・「野人対瓶花(やじんたいべいか)」に焦点を当て、北斎と「菊花」の関連についての考察を試みたい。

第1章　北斎の大望

江戸庶民に親しまれてきた「菊花」は、元来古くから中国で栽培されていた。様々な菊の品種は、何度かに渡り日本に伝来したと言われている。唐文化から渡ってきた文物のひとつとして、庭に不思議な効き目の霊草として植えられ、

薬草・薬品として使用されてきたと言われている。「菊花」は、重陽の節句等の祝い時に、酒の中に入れて健康、長寿を願い、「菊酒」として飲まれた。「菊花」は、酒に入れて飲まれるばかりだけではなく、宮崎法子『花鳥・山水画を読み解く―中国絵画の意味』には、中国古来の薬物書『神農本草経』に「めまい、眼疾、耐老延年の薬」として記載されており、また「菊の花・葉・苗を百日間、陰干しにして粉末にし、白松脂で固めた錠剤を「不老長寿」としていた」とあるといったことを述べている。このように古代中国において薬として使用されていたことが分かる。

佐々木康之『水―神秘のかたち　Prayers to Water』によると、生命の源であり、恵みの源である「水」は、吉祥に結びつきやすいとされ、その代表例が正に「菊慈童」であると指摘している。「菊慈童」は、古代中国の王に愛されながら、罪により辺境の地に流されてしまう慈童の話である。その慈童が、帝より賜わった法華経の経文を「菊花」の葉に書き付け、その葉から露が川に落ち「不老不死」の霊薬となった水を飲むことで「不老長寿」を保ったというものである。この故事により「菊」の持つ力・能力がよく知られるようになったのである。

「菊花」は「不老長寿」の象徴であり、縁起の良い、「幸せ」の象徴・花として親しまれてきた。事実、「菊」の花は、江戸時代流行した朝顔や、ツバキなど他の花に比べて花弁や葉が落ちにくく、枯れにくい。こうしたことからも「菊花」は長生きの象徴と考えられてきた。現代の日本でも枯れにくいことから還暦祝い等の長寿の祝いや、様々な儀式でも「菊花」が登場している(7)。他の植物と比較しても長持ち、長生きする「菊花」は、人々に好まれ、江戸時代に植物・薬草として、また「菊人形」、「菊細工」としても人気を博した。「菊花」は長生きする点からしても、「菊人形」や「菊細工」に向いている花である。こうしたことも「菊花」の人気の理由の一つといえるであろう。

北斎は、90 歳（1849 年 4 月 18 日）まで生き、作画期間は 70 年にも及んだ。68、69 歳の時に脳卒中に見舞われたのをきっかけに自家製の漢方薬を作り、薬を朝晩二回飲み、特に健康に気を付けていたと言われている。事実、年齢を重ねても眼鏡もかけず、背も丸めずに版下絵を描いていたのである。江戸時代の平均寿命は男性 45，5 歳、女性 40，6 歳と非常に短命であったと言わ

れている中、大層長寿であった。画家として情熱をもって、多くの作品を描くことに力を注いでいた北斎は、「長寿・長命」について熱心に考え、「不老長寿」は正に北斎の願望であった。

北斎は、信仰にも篤い画家で、七福神など「神」や縁起の良いものを自ら進んで多く描いていた。実際に長生きの象徴と考えられている「富士山」や「龍」を多く描いている。最晩年の作である「富士越龍」（図②）は、黒雲の中を昇天する龍が富士山とともに描かれる。辰年生まれとされる北斎が龍に自身を重ね、「不老長寿」を願う「心象風景」といえる。

「不老長寿」の象徴として取り上げられる歴史上の人物をも描写しており、その一つが「富嶽と徐福」（図③）である。紀元前半ば、徐福[8]は秦の始皇帝の命により、不老不死・不老長寿の薬を探しに日本へとやってきた。そのような歴史的伝説を描いた作品である。富士の偉大さに徐福は驚き、手にしていたラッパを思わず落としてしまった描写である。

北斎晩年の作品『富嶽百景』（図④）初編の最終ページには、北斎の自筆と思われる跋文[9]が記されている。そこには、長く生きて絵を描くこと、「不老長寿」を強く願う北斎の様子がうかがえ、文字で残すほど「不老長寿」に対しての強い思い入れがあったことが推量される。超越した神妙の域に達するまで生き続けるという、絵の道完成への執着は「不老長寿」、「生」への執着でもあった。飽くことなき絵の道の追求は、高齢になってこそ一層激しくなったといえよう。描いた絵のほとんどすべての落款に年齢を記入し始めたのも、『富嶽百景』を刊行した 1834 年（天保 5 年）以降である。

これほど北斎は「不老長寿」に非常に強い願いを持っていた。北斎にとって「不老長寿」の象徴であると考えられている「菊花」は、大変喜ばしい主題であった。これほどまでに長寿にこだわった絵師は他に見当たらない。

第 2 章　「長寿老人」と「菊花」

「不老長寿」を象徴とすると考えられる北斎の作品を、長野県小布施市にある美術館・「北斎館」で鑑賞することが出来る。

北斎が 1842 年（天保 13 年）83 歳の時に、天保改革の一環として奢侈禁止令が出された。この禁止令により歌舞伎界、出版界に波及、「役者絵」、「美人画」、「版本」等も著しく制約を受けた。北斎を初め、歌川派の絵師たちも絵筆を執ることが出来ず、わずかに神社仏閣の絵馬や、教訓本、鳥や花を肉筆画で描写した『肉筆画帖』等を描けるのみであった。作画に不自由を感じていた北斎は、長野県小布施市の豪商・高井鴻山（1806-83）[10]に呼ばれ、小布施行きを決行した。小布施市で絵を描いていたことから、現在、北斎の作品が所蔵されている美術館・「北斎館」が、長野県小布施市にある[11]。そのような北斎館で、実際に「菊花」とともに働く江戸庶民を描いた作品を鑑賞することが出来た。その図が、本章で取り上げる作品・「野人対瓶花（やじんたいべいか）」（図⑤）である。

「野人対瓶花（やじんたいべいか）」（図⑤）は、紙本着色一幅の掛け軸の作品で、「肉筆画」として描かれている。大きさは縦 113，5cm、横 49，0cm と非常に大きな作品である。年代ははっきりと証明されておらず、不明な点が多い。

しかし、本図の斜め右下に記されている北斎の画号が、「画狂老人　北斎筆」とある（図⑤-1）。「画狂老人」の画号は、北斎が晩年に記した画号であり、晩歳北斎が多く描いた肉筆画に「画狂老人」が記されている。こうしたことから「野人対瓶花」（図⑤）は北斎が晩年に制作した作品であると考えられる。

この作品は「牡丹」や、「蓮」、「キク科の花」を表し示したのではなく、「菊花」と「農夫」、貴賤の取り合わせを描いた作品であると考察される。葉の形容、花弁も「菊花」に似ており、正に北斎の描く「菊花」である。「菊花」は全部で 100 種類以上あるとされる。北斎はその様々な種類の「菊花」を『北斎漫画』や「花鳥画」等多くの絵手本や、版画、肉筆画に多く描いている。「不老長寿」の願いが込められた「菊花」を好み、常に「菊花」を描いた北斎は、「菊花」を描写することによって示現され、北斎自身の心を落ち着かせていたように思われる。

野人とは、田舎じみて洗練されていない人の事を指す。農夫の姿をした人物が一人、使いこなされた割れた鉄なべに生けられた「菊花」を見上げている作品である。通常では、美しい花とともに貴人や粋人が描写されているが、農夫と植物・花という取り合わせは極めて珍しい。静粛に並一通りではない品位の高い崇高な絵である。厳かで清浄な空気が流れている。柔らかな眼差しで、農

夫とされる老人が、上方に生けてある花を見上げ、快い心持で見つめる様子が印象的な作品である。通例では草木の枝・葉・花などを切り取って花器に挿し、席上に飾るのが生け花である。座った位置よりも上に花を飾ることはなく、見上げるように飾る例は考えにくい。

『北斎漫画』などの絵手本や「野人対瓶花」と同様、肉筆画で紙本着色一幅の「杣人と雁」（図⑬）、「月下猟夫」（図⑭）等にもあるように、北斎は人物を描く際、上を見上げている様子を描写することが多い。これは、上を見上げることで縁起が良くなり、常に上を見上げて生きていくことが良いという信仰の表れであると考えられる。北斎は信仰に篤い絵師としても知られており、万事、物事良くなるようにとの願いや、北斎の願望である長生きをしていつまでも健康でいられるようにという、不老長寿の願いを神仏に祈願する思いが込められているように推測できる。また見上げる・仰ぎ見るという動作には、称賛や尊敬、奉るという意を表すことでもあるため、北斎の望みが叶うように祈る気持ちを描写していると思われる。

鉄なべに生けられた「菊花」は、白や薄紅で描かれ、清新な印象が感じられる。この花を牡丹、蓮と解釈する説もあるが、画のタイトルにも「瓶花」とあるようにどの花を北斎が描いたのか、現在確たる研究は見当たらない。しかし、花や葉の形から「菊花」、キク科の植物と考えられる。

花の色や形から見解してみると、「ダリア」（図Ⅰ）という江戸時代末に既存していたとされるキク科の植物、和名の天竺牡丹（てんじくぼたん（別名、菊牡丹））を表現しているのではないかと考えられる。江戸時代「ダリア」は、「菊花」と同様の花とされていたとする説もある[12]。

また、北斎が「菊図」2 図（双幅）中に「ポンポン」（図Ⅱ）というキク科の植物を菊と共に描いている。タイトルに「菊図」とあるように、ポンポンを「菊花」として描いている例もある通り、北斎はダリアを「菊花」と見なして描いたと考えることも出来る（図⑤・図⑤-3）。

この花がキク科の植物、ダリア・天竺牡丹（別名菊牡丹）を描いたと推察することが出来るのならば、北斎は菊（キク）を強調し、キク科の植物、もしくは葉の形が「菊花」と似ており、北斎の描いた他の作品や絵手本に描かれた菊と葉・花の形が類似する点が多いことから、「菊花」と仮定してこの作品を描

いたと考えることが出来る。

ここからは「農夫」と思われる人物と「農夫」の周囲に描かれた事物の描写・表現に着目し、北斎の願いであったと思われる「不老長寿」の関係性について、より詳しく見ていきたい。更に図を拡大して見てみる（図⑤-2）。

画の中心に描かれた農夫の鼻梁は高く、手足が長く、北斎が生きていた時代の世人（江戸庶民）や、老人にしては高身長である点が目立つ（図⑤-2・図⑤-4）。

農夫の姿をしているが、手（図⑤-5）も足（図⑤-6）も汚れていない。農夫が休息をとっており、素足であり、自身の持ち物だと想定できる鉄なべに花を生けてその花を眺める様子からは、家の中の描写であると考えられる。手足を洗い、綺麗に描かれているとも考えられるが、やはり農夫の手足であるにしてはもう少し土色が付着していると思われる。北斎の描いた絵手本『北斎漫画』や「富嶽三十六景」に登場する働く人等、北斎が働く人物を描く時、ほとんどの人々は作業に熱中し、汚れが手足や衣服に付いており、精を出して仕事をしている疲れた表情の働く姿（図⑥）が描かれるのに対し、この「野人対瓶花」の農夫は老いて疲労困憊した老人には見えず、顔にも手にも皺はなく、足には若い人のような筋肉がついて生き生きとしており、農夫の作業の疲れや老体に衰えが感じられない。年を取った老身が精神的・肉体的に若さを取り戻し、若返りを果たしている画のようにも思われる。手先の爪の部分はとがっており、土などの汚れではなく、何やら爪に色を塗っているように思われる。当時の日本人には考えられない、珍しい描写である（図⑤-5）。

その上、農夫とされる老人の髪型が、少し長めである。北斎が描くどの作品にも農夫を描くとき、後ろ髪を長くして結んでいる描写は見当たらない。（図⑥）を見てみても、働く日本人男性の髪型は、ちょんまげ頭で、短い髪型で描かれていることが分かる。しかし、やはり「野人対瓶花」（図⑤）の農夫とされる老人は、髪を結い、下の方を少し伸ばしているように思われる。北斎は、あるいは異国の人を描写したのではないだろうか。

衣服の襟の形や大きさは、日本では見ることが稀な独特のデザインであり、紋様も中国の図柄の様に思われる（図⑤-2）。襟、文様について更に詳しく見てみることにする。北斎が描く日本人、江戸庶民の男性は、農作業服を着て働

いている。「野人対瓶花」（図⑤）に登場している老人も日本の農夫のように、衣服は「蓑[13]」を身に着けている。「蓑」とは藁や、棕櫚、茅、菅等の茎葉を編んで作った雨具で、多く旅人や農夫が身に着けるのであるが、異なる点は、やはり老人の衣服・農作業服と一体化して描かれている「襟文様」である。北斎は、日本絵画だけではなく、漢・洋あらゆる作風を学んでいる。また、北斎は中国の絵画や中国の古典、文学に大変興味があったとされており、多岐にわたり中国絵画作品を遺している。北斎は「浮世絵」に「漢画」を導入した最初の人物と考えられている[14]。南宋画・文人画家が肉筆画でしか描けなかった絵画を作品として木版に仕立てたとされる。北斎は、中国の絵画を描く際、「野人対瓶花」（図⑤）と同じように、人物には日本人の衣服にはない、衣装と一体化した襟を描いていることが多い（図⑦）、（図⑧）。（図⑦）は江戸時代後期の狂歌師・石川雅望（狂名・宿屋飯盛（六樹園飯盛））作の読本で、中国小説の一部が取り入れられた場面を、北斎が挿絵として描き表した作品である。（図⑧）は、漢画的な描法で表現された作品で、風景画「富嶽三十六景」や、花鳥版画「菊に虻」が描かれた 1820 年～1833 年頃の画号「前北斎為一」と一致することから、同じ時期に制作された、肉筆画であると考えられる。題目にある「寒山拾得」とは、中国・唐の時代に天台山に住したという中国の伝説上の二人の隠者・詩僧のことで寒山は文殊菩薩、拾得は普賢菩薩の化身とされる[15]。（図⑧）のように北斎は、中国人を表す際、衣装に襟を必ずと言って良いほど描写する。しかし、北斎以外の絵師が同じ題目、同じテーマの作品（図⑨）、（図⑩）を描いても、他の絵師は中国人を描く時に衣装に襟を付けずに描いている。やはり、中国人の襟の描写は、北斎ならではと言える。（図⑦）や（図⑧）には、「野人対瓶花」（図⑤）のような文様が施されていないにしても、北斎が日本人男性を描く際には見受けられない特徴的な点である。

「野人対瓶花」（図⑤）に描かれている「襟の形」や「襟文様」も、やはり日本人になじみのないように思われる。（図⑦）も同様、「襟の形」は、「8 角形」、もしくは「羅針盤」のように見える。中国人は「8 角形」を好むと言われている。それは、中国思想で知られる「陰」と「陽」の組み合わせが、8 通りあるためである（図⑪）。また、襟の端端に描かれている文様は、まるで「陰」と「陽」の組み合わせを描いているようにも見受けられる。「I」のような朱色

で描かれた文様も、日本にはない独特の文様であり、中国文様のように思われる。これまで示してきたように、本図に示される襟の形が「8 角形」であり、文様が中国文様であるとするならば、「野人対瓶花」(図⑤)に描かれた人物は、中国人の老人なのではないだろうか。

花を生けた瓶は、花瓶ではなく鉄なべ、もしくは土鍋のようなものとなっている（図⑤-7)。鉄なべは、中国で使う調理器具の一つ、中華鍋を描いたように思われ、日本製のものとして描いたようには感じられない。また、描かれた鍋が土鍋であったとしても、中国人と考えられる老人が日本人独特の衣服を身に着けている様子を描いたように、中国人にも鍋を使わせたと見ることも可能であろう。

以上の事から推測すると、これは、日本の農民を描いたのではなく、異国（中国）から来た人物、もしくは老いを感じさせない描写から超人、中国から伝わる「不老長寿」を表した「老人」、北斎の望む理想とした長寿の農夫姿を描写した作品であり、画中の花を、花や葉の形から「菊花」と見なすことが出来るのならば、中国の菊の露を飲んで「不老不死・不老長寿」となった「菊慈童」になぞって描いた作品であると考えられる。

しかし、ここで少し疑問が残るかもしれない。先にも述べた通り、「菊慈童」の伝承に登場し、「不老長寿」となったのは、「老人」ではなく、「菊慈童」の題目にある通り「慈童」、つまり「子ども」である。しかし、「老人」と「子ども」には多大なる共通点が見られるのである(16)。

「老人」と「子ども」は、「生」と「死」の境（生と死の境界）におり、非常に似ている。鎌田東二は『翁童信仰』の中で、両者は「互換性」という点で共通し、常に生と死の境界にいることから「神」もしくは「神」に近い存在と見なされることがあるとしている。また赤坂憲雄『方法としての境界』によると、「老人」と「子ども」は常に、生死の魂の間を浮遊しやすい不安定な魂とされる。「老人」が「子ども」と結びつけられる理由は存在するのである。「彼岸の入り口」に近づいた「老人」の魂こそは、生死の敷居をまたぐ在り様において、生まれた子（子ども）の魂と同質のものであるからとされる。此岸と彼岸のはざまに揺蕩い、地に足のつかない不安定さをまとうものとして、「文化記号的」な布置において、「老人」と「子ども」は、等しい地点に立つのであ

る。

こうしたことから、「老人」は「子ども」と関連性があり、本図の「野人対瓶花」（図⑤）は「菊慈童」の伝承と見なすことが出来、描かれた神聖な「老人」を「菊慈童」の話と結びつけることが可能なのである。

「野人対瓶花」のように、働く老人と花の組み合わせは他の絵師、作品にはない北斎独特のテーマである。北斎ほど男性や農夫の働く人々を細部にまでこだわり、表情豊かに大きく描き、主題として働く人々を描いた絵師は存在せず、北斎は老人や働く人に何らかのこだわりがあったように思われる。

これは、町人であった北斎にこそ描ける画面構成であると考えられる。信仰に篤く、長生きすることを目指し、年齢を重ねても活気あふれる生活をすることを願望とした北斎であったと考えられているため、働く男性・「不老長寿・不老不死」を代表する生き生きとした老人を描き、不老長寿の象徴の花、「菊花」とともに描いた北斎の願いを込めた作品であると思われる。

殊に中華鍋と考えられる鉄なべの下に描かれている木（図⑤-8）は、北斎の不老長寿に対する思いや、信仰心を表しているとすれば、これは生命の木、樹木を神聖なものとして、あるいは神霊が宿る、崇拝の対象とし、描いているのではないかと考えられる。樹木の樹齢は、非常に長命であるため、やはり信仰心の表れとして不老長寿の象徴・老人、「菊花」とともに木を描いたとも考察される。

次に「野人対瓶花」（図⑤）の背景に着目してみる。「遠近法」を無視した無地の背景となっている。これは、「浮世絵」の手法の一つとされる。色も一色で、緻密な塗り方ではなく、あえて、平面的に塗っているのが特徴的である。北斎の版画、肉筆画の「花鳥画」の他の作品においても、ひといろで表され、平面的に描かれている。こうした塗り方をすることで、本図の対象となる「老人」と「菊花」の存在感を際立たせている。「浮世絵」の影響がみられる、印象派の父・画家エドゥアール・マネ（1832-1883）の作品「笛を吹く少年」（図⑫）の背景は一色で、平面的に表現されている。「野人対瓶花」（図⑤）の背景は、先述したように一色のみ使用されており黄金色で、厳粛に描かれ、心静かに祈りを込めたような表現となっている。画中の「老人」は上述の通り、家の中の描写のようにも思える。しかし、黄金色の独特な背景により、まるで神聖

なる「老人」が宙に浮いているようにも見て取れる。正に「不老長寿」といったような「神秘性」が感じられる作風であると思われる。神仏思想に加え、「不老長寿」の術を求めていた方士を描写した「富嶽と徐福」（図③）と、「野人対瓶花」（図⑤）には多くの共通点があると思われる。「野人対瓶花」（図⑤）、「富嶽と徐福」（図③）双方共、遠近法を使用しない「浮世絵」の手法を取り入れており、色彩も神秘的な黄金色、金色一色に塗ることにより、人物の存在感を際立たせる技法を用いている。どちらの作品も、物体が存在しない空間の宙に浮いているような描き方においても神聖で清浄感がある。やはり北斎の祈念は深く、このような「野人対瓶花」（図⑤）や、「富嶽と徐福」（図③）にも正に「長寿」の思いが込められているのであろう。

画号には「画狂老人」と押印してある。「画狂老人」とは、前述したとおり、北斎が晩年に号した画号で、「絵だけに熱中し、長生きをしていつまでも絵を描いていく」という思いが込められており、ここからも長生きすることへの憧れを感じとることが出来、その思いを絵で表現していると推察される。

北斎の祈りは深く「100 歳まで、自分の思いのたけを作品として残したい」、その願いが「不老長寿」になり、その思いが「野人対瓶花」（図⑤）という作品として生まれたのであろう。年齢が高くなるにつれて、「不老長寿」の象徴とされている、「獅子」を描いたり、「富士山」や「亀」を描いたり、「菊花」を描いたり、薬種となる草花等を描いたりしたのは、正に願いであった「長寿」の思いを込めて描きたかったからであると思われる。

第 3 章　町人北斎の絵画表現

「野人対瓶花」（図⑤）のように北斎の作品には、「富嶽三十六景」や「諸国滝廻り」、『北斎漫画』といった働く江戸庶民（男性）や、長生きの象徴として表現された精を出し、働く老人を描いた作品も、少なからず存在する。先にも少しふれたが、ここで詳しく「野人対瓶花」とほぼ同時期に描いたと考えられる作品を 2 図挙げておきたい。2 図は、「野人対瓶花」とともに北斎館に所蔵されている。

1図に、「杣人と雁」（図⑬）という作品がある。杣人とは、山で木を切る「きこり」のことである。仕事道具である「まさかり」に片足を乗せて、休息をとる様子が表現されている。男性が頬杖をついて見つめるその先は、晩秋の空で、多くの雁が列をなして飛んでいる。更に作品を詳しく見てみると、男性は手に「徳利」のようなものを持ち、お酒に酔っているような様子が見受けられる。そのため、足がふらついて「まさかり」に足を乗せて、体を支えていると思われる。もしくは、お酒を飲んでいることで普段とは違った行動・動作をとりたくなったため、片足を動かし、「まさかり」に乗せているとも考えられる。いずれにしても、大衆の中で生きた北斎ならではのあたたかな眼差しが感じられる、大変ユニークな作品である。

もう1図は、「月下猟夫」（図⑭）である。火縄銃を抱えた猟師が、本図を見る私たちの方を向き、山頂と思われる場所で、斜め上を見ながら「鹿笛」を吹いている。空には、満月と雁の群れが描かれている。この作品ももう少し詳しく見てみる。作品のタイトルに「猟夫」とあるが、上半身と下半身の向きが異なり、足の交差した姿や形は、まるで鹿の蹄のように見え、丸まった背筋、本図を見る私たちの方を向く眼の形がはっきりしておらず、表情は独特で、人間を描いたようには見えず、北斎が描く人物画とも思えない。人間離れした姿である。これは、単なる人間ではなく、半獣半身の生物もしくは、擬人化した生物を描写したのではないだろうか。「鹿笛」を持っている点からしても、雌の鹿を呼び寄せる「人間の姿をした雄鹿」を描いているのではないかと思われる。鹿は、オス・メスの愛が強いとされる。正に雄鹿が「鹿笛」で雌鹿を呼んでいるのであろう。また先述した通り、山の頂上の描写のように見えるが、人間が頂上に立って「鹿笛」を吹くのは違和感がある。北斎は『北斎漫画』の「白鼠」を初め、昔話などに登場する擬人化された生物を多く作品に遺している。北斎は「菊花」や働く人々、富士山等の他に、擬人化した動物・生物を描くことを好んでいたことでも、擬人化された「鹿」を描写したと考えることが出来る。

「野人対瓶花」（図⑤）を含めたこの3図は、肉筆画で掛け軸の作品であり、柔らかな色合いで表現されている点が共通している。また、3図にそれぞれ一人ずつ描かれている人物が、若い人物ではなく老いた男性（もしくは老いた様子の擬人化された生物）であることや、どの人物も働く姿であること、やや上

を見上げて物思いにふける様子で表現されていることが非常に似ている。そして「杣人と雁」（図⑬）、「月下猟夫」（図⑭）においては、2 図どちらにも「雁」が描かれている点が共通する。こうしたことから、3 図はやはり同時期、近い時期に描かれた作品であると考えることができる。

北斎は、多くの絵師が描いている貴人等を描くことは少なく、先にも挙げた「野人対瓶花」（図⑤）や「杣人と雁」（図⑬）、「月下猟夫」（図⑭）、「富嶽三十六景」等の風景画に描く人々のように、江戸の庶民や、働く男性（時に働く女性や子ども）、老人、優雅に余暇を楽しむ庶民の様子などといった人々を中心に描くことが多い。画面中いっぱいに、そして時に人々を主として大きく描く（図⑥）。他の絵師が庶民を描くことはあっても、小さく描かれることが多い。北斎が描く多くの「菊花」と同様、働く人々をこれほどまでに多く描く絵師は、北斎だけであろう。

働く人々などを「菊花」とともに描き、時には庶民を描写しているこうした構図・絵画表現は、「菊花」とともに描いた老人の作品「野人対瓶花」（図⑤）のように、北斎が普段目にしている人々の何気ない暮らし、健康に気を配り、長生きして働く人々、生活の様子が好ましいと思っていた人々を画に表現した。

北斎は、確かに母方の曾祖父は赤穂浪士の討入りに倒れた吉良家の家老であると言われているが、出生した北斎は、武士でもなければ、貴人、貴族でもない。町人[17]なのである。その町人である北斎だからこそ、庶民と同じ目線になって、働く人々や「不老長寿」の作品、北斎と同様、庶民の好んだ「不老長寿」の「菊花」を多く描けたのであり、庶民の暮らしを、生きる象徴と考えた北斎であるからこそ表すことが出来た絵画表現なのであろう。

結

「不老長寿」という願望をもって、絵を描き続けた北斎にとって「菊花」は北斎そのものである。仁徳天皇の頃日本に伝わった中国漢代の伝承・「菊慈童」をもとにして日本では「菊花」が「不老長寿」の象徴であり、人々に幸福をもたらす花として親しまれるようになった。北斎は作画期間 70 年にも及ぶ中、絵を描くことのみに熱中し、平生からいつの時までも生きて、多くの作品を遺

す夢・「不老長寿」という願望を持って絵を描き続けたのである。代表作「富嶽三十六景」をはじめ、数々の作品には「不老長寿」を象徴とする「富士山」や、「龍」、「獅子」、「亀」など、吉事の到来を祈るための伝説や、霊験あらたかな、縁起が良いとされる事物を多く描いてきた。北斎は「菊花」を描くことで自身の願いである「不老長寿」を表したのであろう。本稿で論じた「野人対瓶花」（図⑤）は、正に北斎が描きたかった願望「不老長寿」の「老人」と「不老長寿」の象徴・「菊花」の組み合わせが見事に表された北斎の傑作である。本図の人物は、異国の神聖なる「不老長寿」となった「老人」であるが、念ずる思いが強いあまり、「老人」の顔はまるで「菊水」を飲んだ若い北斎自身を描いたとも思える。

北斎にとって絵を描くことは「生きているしるし」であったと思われる。100歳まで長生きして真の絵師になることを願った北斎が「不老長寿」を祈り、「不老不死」の象徴である「菊花」をも、北斎自身そのものとし、様々な「菊花」を描き続けていたと考える。「菊花」に込めた北斎の思いは強く、北斎にとって「菊花」は大変喜ばしいものであり、「菊花」を描けたことが北斎自身心が満ち足りていたように思われる。

（図①）鈴木春信　「見立菊慈童」1765-66 年（明和 2-3 年）
東京国立博物館所蔵

（図Ⅰ）「ダリア」（右図）、（左図）

（図Ⅱ）「ポンポン」

（図②）葛飾北斎「富士越龍」
絹本着色一幅　1849 年
長野県小布施北斎館所蔵

（図③）葛飾北斎「富嶽と徐福」
絹本着色一幅　年代不詳
長野県小布施北斎館所

（図④）葛飾北斎『富嶽百景』初編　1834 年（天保 5 年）
山口県立萩美術館・浦上記念館所蔵

（図⑤）葛飾北斎「野人対瓶花（やじんたいべいか）」年代不詳　紙本着色一幅（肉筆画）
113，5×49.0cm　北斎館所蔵

（図⑤-1）葛飾北斎「野人対瓶花」中、「画狂老人　北斎筆」（画号）

（図⑤-2）葛飾北斎「野人対瓶花」（拡大図）

（図⑤-3）葛飾北斎「野人対瓶花」（部分）

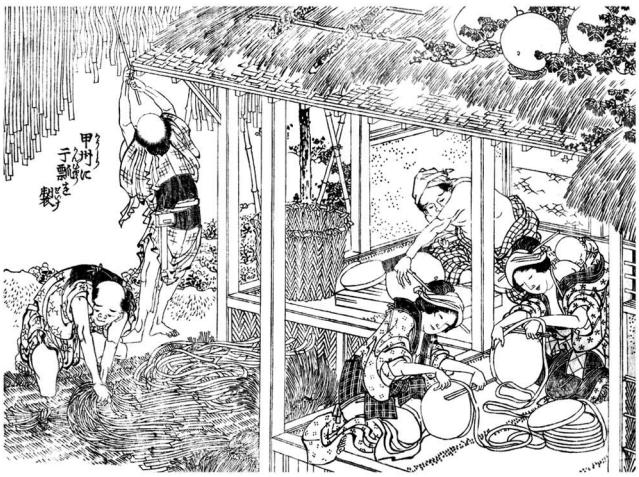
（図⑤-4）葛飾北斎「野人対瓶花」（部分）

（図⑤-5）葛飾北斎「野人対瓶花」（部分）

（図⑤-6）葛飾北斎「野人対瓶花」（部分）

（図⑤-7）葛飾北斎「野人対瓶花」（拡大図）

（図⑤-8）葛飾北斎「野人対瓶花」（拡大図）



（図⑥）葛飾北斎　『北斎漫画』「三編」1814 年～（文化 11 年～）
江戸東京博物館・山口県立萩美術館浦上記念館所蔵

（図⑦）葛飾北斎（挿絵）「飛騨匠物語」[18] 1808 年　個人蔵
（画中の左側にいる中国人の衣装に、襟が付いている。右側にいるのは日本人。）

（図⑧）葛飾北斎「寒山拾得図」絹本着色　1820～33 年
すみだ北斎美術館所蔵
（両人それぞれ衣装に襟が付いている。）

（図⑨）狩野景信「寒山拾得図」年代不詳　個人蔵

（図⑩）顔輝（がんき）「寒山拾得図」年代不詳　個人蔵

（図⑪）「陰」と「陽」の組み合わせは、「8 通り」。

（図⑫）エドゥアール・マネ≪笛を吹く少年≫　1866 年
オルセー美術館所蔵

（図⑬）葛飾北斎「杣人と雁」
年代不詳　北斎館蔵

（図⑭）葛飾北斎「月下猟夫」
年代不詳　北斎館蔵

---

(1) 江戸時代後期の浮世絵師。幼名は時太郎。10 歳の時に鉄蔵と改名。幼い時から絵を描くことに大変興味を持っていた北斎は、14・15 歳の時、木版彫刻師に弟子入り。1778 年には勝川春章に師事し、画名を「勝川春朗」と称する。後に狩野派（桃山～江戸時代を通じて続いた日本絵画史上最大の流派。江戸時代には狩野派は、漢画とも呼ばれた）を学び、司馬江漢（江戸時代後期の画家。西洋画の影響を受けた画家として知られる）の銅版画に感銘を受けるなど、和漢洋のあらゆる画法を体得。役者絵・美人画・風景画・花鳥画等様々な分野をにわたり、生涯に 3 万枚以上の浮世絵を描いた。（「風景画」は主に版画、「美人画」や「役者絵」などは肉筆画が多いが、「花鳥画」「菊花」の作品は、版画・肉筆画の両方の作品が存在する）絵を描くことだけに熱中し、常に探究心を持ち続けた北斎は、心機一転・新

たな思いで多くの作品を描いていきたいと考え、30 回以上何度も画名を変えて、引っ越しを 93 回繰り返していたと言われている。画名を「葛飾北斎」としたのは、1798 年からで、この名を用いて風景版画を発表した。富士山を主題とした『富嶽三十六景』（1830 年）が評判となり、浮世絵における風景版画創始者の地位を確立。北斎の作品はモネ、ルノワールなどフランスの印象派の画家、アメリカの評論家など海外にも多大なる影響を与えた。文化年間は主に挿絵に専念し、絵手本『北斎漫画』を刊行。

(2) 富士山をテーマとした「富嶽三十六景」は、1831 年（天保 2）年前後に出版され、追加出版 10 図を加え全部で 46 図のシリーズからなる。この作品は北斎が 70 歳を超えて描き始めた作品である。北斎が『富嶽百景』初編につけた有名な跋文の中で「70 年前描く所は実に取に足ものなし」と語っているように、このシリーズこそ北斎が満を持して放った会心の作品であると言われる。「富嶽三十六景」は雄大な富士山の姿を力強く描き、大胆で奇抜な構図を作り出すといった変幻多彩な絵図によって浮世絵の風景画に新しい分野を開いた。また、造形表現の可能性を広げてその後の絵画史の展開にも大きな影響を及ぼした。後に、「富嶽三十六景」はフランスの印象派、後期印象派のモネ、ホイッスラー、セザンヌ、ゴッホといった画家たちや愛好家たちに強い影響を与え、ジャポニズム（日本趣味）流行の重要な一因となったのである。本図は当時霊峰富士を信仰し、登頂を志す人々が多く、庶民の間で富士講が流行していたことと、北斎が富士山を好んでいたことから描いたのだと思われる。北斎は「富嶽三十六景」を描いた後も長年、富士山を描いた。富士山は「不老不死」、「不老長寿」の象徴であった。北斎はもっと長生きして絵を描き続けることを願望とし、今以上に素晴らしい画家になりたいという夢を持ち、多くの富士を描き続けたのだと考えられる。正に北斎の願いが込められた作品、シリーズものといえる。「富嶽三十六景」には、46 図全てにおいて富士は描かれている。「菊花」と同様、北斎ほどまでに富士山にこだわりを持って、数多く描いた絵師は今までに見当たらない。北斎は富士山の図を形や色を少しずつ変えて、丁寧に描いている。北斎以外の絵師は富士を描いても構図にこだわりはなく、小さく描かれ、多くは描かれていない。「不老長寿」の象徴である「菊花」と富士山は、北斎の願いであったため、このように多岐にわたって描かれているのであろう。また、「富嶽三十六景」においては、富士山とともに必ずと言って良

いほど人々（働く男性、女性、農夫）を描いている。「不老長寿」の象徴の富士山と、人物を細やかに描くことで、庶民の何気ない様子が生き生きと感じられ、北斎を初め、人々の願いであった「不老長寿」を求める人々と富士山の組み合わせを意識して描いていると思われる。本図は、単に当時流行した富士山が描かれているだけではなく、北斎の願望とした「不老長寿」が見事に表現されている、正に北斎そのものなのである。

(3) 鎌田東二著『民衆宗教史業書　第27巻　翁童信仰』（雄山閣出版、1993年）が詳しい。周の穆王（ぼくおう）に仕えた侍童。中国古来に伝わる長寿話に登場する。侍童は、南陽郡の酈県山（れきけん）（現在の中国河南省にあるとされる山）で、菊の葉に落ちた露を飲み、不老不死・不老長寿となったと言われる。この話が日本に伝わり、「能」にも登場する。菊花の咲き乱れる神仙境を舞台に、菊の花のめでたさと、その菊花が水に滴り不老不死・不老長寿の薬になった由来を語り、永遠の美少年の長寿を寿ぐ曲となっている。西の奥地、酈県山の麓から薬の水が湧き出たとの報せを受けた帝は、勅使（ワキ）と従者（ワキツレ）を派遣する。勅使が山中に入ると、一軒の庵があり、中に一人の童子（シテ）が住んでいた。人里遠く離れた深山幽谷に住む童子を見て勅使が訝しむと、童子は周の穆王（ぼくおう）に仕えていた「慈童」という名の童子であると名乗る。穆王（ぼくおう）といえば700年も昔の人であるため勅使は驚く。慈童は証拠として王から賜った枕を見せる。枕には、法華経の妙文が書き添えられていた。この妙文を菊の葉に書き写したところ、滴る雫が「不老不死」「不老長寿」の霊薬と変じたのである。慈童は、この薬の酒を讃美し、帝の長寿を言祝いで舞い戯れると、ほろ酔い気分で仙家へと帰ってゆく、といった内容となっている。観世流で「菊慈童」といい、他流における曲名で「枕慈童」と呼ばれる場合もある。「枕慈童」も観世流・「菊慈童」と同様、中国の酈県山に流された少年が、経文を写した菊の葉の露を飲み、700歳まで若さを保った物語となっている。この長寿話を主題とし、菊慈童を女性に置き換えて描いた浮世絵も存在する(図①)。

(4) 「水」は、生命の根源であり、人々は「水」に対して畏敬の念をもって接してきた。それが信仰にも結び付いている。日本、中国において「水」にまつわる昔話や神話は多く、『菊慈童』もその一つである。「菊慈童」を表すとされる作品がいくつか存在する。「菊水蒔絵徳利」は流水から「菊花」を半分のぞかせるもので、菊水文様の典型を表す。菊水文様の施される徳利は、酒を長寿の霊薬と見立てるもの

で、慶事の酒宴を飾ったと思われる。婚礼などの儀式で用いられる酒器にも、「水」にまつわる意匠が施される。

(5) 川添登著『菊―日本文化を考える』、佐々木康之著『水―神秘のかたち　Prayers to Water』（サントリー美術館、2015 年）、藤澤衛彦著『日本伝説研究　第八巻』に拠る。

(6) 北斎が描いた動物や植物を個別に取り分けて、そこに込められた思いを明らかにしていく研究は少ない。私は論文「『北斎漫画』と白鼠」において、北斎が『北斎漫画』の中で特に着目して描いている鼠について分析し、鼠（あるいは鼠が多く登場するとされる説話）と『北斎漫画』の関連についての考察を試みた。『北斎漫画』に多くの様々な動物が描かれている中で、白鼠だけが 2 ページにわたって堂々と描かれ、白鼠のみ擬人化して描写されていることから、北斎は鼠の図に何らかの思いを込めて描いたのであると考えた。江戸時代、白鼠は「福」の象徴とされ、北斎や多くの人々は鼠を好み、ペットとして親しまれていたとされる（「東海大学文明学会『文明研究』第 34 号、2015 年」）。

(7) 「菊花」は現代でも仏花としても知られている。これは「菊花」には「不老長寿」の他に、邪気を払う力があるとされることによる。

(8) 中国、秦代の方士、仙術家。『史記』では徐市（じょふつ）ともいう。秦の始皇帝の命で童男童女約 3000 人を連れて、東海三神山（蓬莱山・方丈山・瀛州山）に不老長寿・不老不死の薬を探しに出かけたという。しかし、三神山は発見できず、日本の紀州へ上陸したと言われており、日本の新宮市蓬莱山にこの徐福の墓と伝えるものがある。

(9) 北斎の人柄や考え方に関して、絵手本の序文や跋文、書状、川柳などの北斎の言葉から、その一端をうかがうことが出来る。特に有名なものが 1834 年（天保 5 年）、北斎が 75 歳の時に出版された全三巻からなる絵手本『富嶽百景』初編の最後にある跋文である。

「己　六才より物の形状を写の癖ありて　半百の此より数々画図を顕すといえども　七十年前画く所は実に取るに足るものなし　七十三才にして稍禽獣虫魚の骨格草木の出生を悟し得たり　故に八十六才にしては益々進み九十才にして猶其奥意を極め　一百歳にして正に神妙ならんか　百有十歳にしては一点一格にして生るがごとくならん　願わくは長寿の君子　予言

の妄ならざるを見たまふべし」

（「私は、6 才から物の形状を写す癖があり、50 才頃から数々の作品を発表してきたとは言うものの、70 才以前に描いたものは、実に取るに足らぬものばかりである。73 才にして、ようやく禽獣虫魚の骨格や、草木の生え具合を悟ることが出来た。なので86 才でますます腕に磨きをかけ、90 才では奥義を極め、100 歳になれば、まさに神妙の域に達するものと考えている。百数十歳ともなれば、一点一画が生きているもののようになるであろう。願わくば、皆も長生きをして、私の言葉が偽りでないことを見ていてくれ。」）

口語訳は、永田生慈著『アート・ビギナーズ・コレクション　もっと知りたい葛飾北斎　生涯と作品』（東京美術、2005 年）を一部参照。

100 歳を超えてもなお絵師として向上し、長生きをして作品を描き続けようとする気概を語っている。

跋文の中で北斎は、画において「86 才でますます腕に磨きをかけ」（口語訳）と記載している。86 才（1845（弘化 2）年）に手がけた晩年最大級の作品に「須佐之男命厄神退治之図」がある。向島（墨田区）の牛嶋神社社殿に掲げられていた絵額であるが、関東大震災で焼失してしまった。86 才頃からの北斎は「肉筆画」への傾注が顕著になり、常に高みへと登りつめた北斎が最後に到達したのが、「肉筆画」　の世界であった。この頃から北斎は、「肉筆画」の大半に年齢を記入し始めた。

（10）髙井家は信州小布施市の豪商かつ豪農で、名家である。北斎を小布施市に招いた髙井鴻山は農民市村熊太郎の四男三九郎で、祖父・作左衛門は、松代、飯山等の信州各藩、京都の公家九条家御用達の特権を得、財を成した。天明飢饉の時に窮民救済のため、蔵を開き、米を放出、金品を提供したことにより、幕府から髙井姓を与えられる。髙井鴻山は祖父の勧めにより、1820 年（文政 3 年）、15 歳の若さで京へ上り、儒学や絵画を学び、教養を培う。内田千鶴子『宇宙を目指した北斎』によると、髙井鴻山は師である江戸時代中期の絵師・岸駒（1749/1756-1838）が「今江戸で一番の絵師は葛飾北斎だ」と評したため、北斎に会いたいと思っていたと考えられる。1827 年（文政 10 年）、髙井鴻山は再び京へ赴き、漢詩を学ぶため梁川星巌（1789-1858）に師事し、大坂の大塩平八郎とも交友を持ち、国事に目が開かれていった。1832 年（天保 3 年）、梁川星巌に同行し江戸に出て、その紹

介により陽明学者佐藤一斎（1772-1859）の門に入り、蘭学をも学ぶ。小布施伊勢町出身で後に日本橋本銀町で真綿問屋や飛脚屋を営み、髙井鴻山の江戸代理人をしていた十八屋を通じ、北斎と知り合ったのはこの頃とされる。京や江戸の文化人との交友から、髙井鴻山の視野はますます広がることとなる。

(11) 一般財団法人北斎館『北斎館　肉筆画大図鑑』に基づく。江戸に生まれ、江戸に没した北斎は、90 年の生涯に、93 回の転居をしたことは先にも述べたが、その内 4 度も訪れ、半年、一年近くと長期にわたって滞在した場所が、小布施市である。江戸時代、小布施は、綿花の栽培と綿糸の西安、菜種の栽培と菜種油、肥料の油粕など千曲川や北国東海道を利用した交易活動が盛んであり、大変賑わい、宮家をはじめ松代藩や近隣諸藩の御用達を務める豪商も数々あったという。北斎が小布施市を訪れるきっかけもそのような繁栄にあったと考えられる。

(12) 片野考志著『中国文様辞典』、『中国・日本の花鳥画』に基づく。

(13) 北陸、中部、山形等の地方では「蓑」を着た農民の姿が、「雀」を連想させることから「バンドリ（雀）」とも呼ばれている。北斎は「菊花」と同様、「雀」を描くことも多く、『北斎漫画』の中でも登場している。

(14) 永田生慈著『アート・ビギナーズ・コレクション　もっと知りたい葛飾北斎　生涯と作品』に拠る。

(15) 唐の時代、天台山国清寺の禅師が拾って寺に住まわせた拾得と、冷たい岩の穴に住んでいた寒山の二人の伝承が文学や、芸術作品の題材として使われることが多い。寒山が文殊知を象徴し知恵を、拾得が普賢（行の徳）を象徴する仏教の菩薩で、衆生を導き、仏道を成就させようとする行者。

(16) 赤坂憲雄『方法としての境界』（102 ページ）、山田康弘『老人と子供の考古学』（241 ページ）、鎌田東二『翁童信仰』（268 ページ）に基づく。

(17) 江戸時代、絵師は「御用絵師」と「町人絵師（町絵師）」の二種に分類できる。御用絵師では「狩野派」、「土佐派」であり、町人絵師（町絵師）では「葛飾派」、「円山派」、「四条派」が有名である。北斎と同様、「町人絵師（町絵師）」としてよく知られているのは、円山応挙（1733（享保 18）年~1795（寛政 7）年）。しかし、北斎のように庶民の暮らしを描いた作品は少なく、「風景画」、「花鳥画」が多い。

(18) 藤澤衛彦『日本伝説研究　第八巻』が詳しい。江戸時代後期の狂歌師・石川雅望（狂名・宿屋飯盛（六樹園飯盛））作の読本。葛飾北斎画。六巻六冊。1808 年（文

化 5）刊。飛騨の名工猪名部の墨縄が弟子・檜前松光とともに蓬莱山の神仙から工技を授けられ、武蔵に下って美少年・竹芝山人を助けて一の宮との間を取り結び、やがて山人と一の宮はもと仏界を追われた人であることを知り、ついに 3 人とも登仙する。全体の構成を李笠翁の『蜃中楼伝奇』によって謫仙の物語としながら、表面には『今昔物語』の百済河成の説話や、『更級日記』の竹芝寺伝説を明示し、さらに有名な左甚五郎の俗伝を連想させるなど、巧みな翻案と組合せを行っている。作者の国学や中国小説の造詣がうかがえるが、当時曲亭馬琴はこれを「世に行はるるにあらず、畢竟楽屋の評判のみ」と評した。

参考文献

・一般財団法人北斎館『北斎館肉筆画大図鑑』、2015 年。

・佐藤隆信『新潮日本美術文庫１７　葛飾北斎』新潮社、1998 年。

・日野原健司/平野恵『浮世絵でめぐる江戸の花　見て楽しむ園芸文化』誠文堂新光社、2013 年。

・平野恵『19 世紀日本の園芸文化―江戸と東京、植木屋の周辺―』思文閣出版、2006 年。

・太田記念美術館『江戸園芸花尽し』、2009 年。

・北村四郎・吉田光邦『日本の文様　花鳥 2』中国系列　淡交社、1976 年。

・川添登・山田宗睦『菊－日本文化を考える』講談社、1979 年。

・田中孝幸『園芸と文化　江戸のガーデニングから現代まで』熊本日日新聞社、2012 年。

・宮崎法子『花鳥・山水画を読み解く―中国絵画の意味』角川書店、2003 年。

・戸田禎佑『花鳥画の世界　第 10 巻　中国の花鳥画と日本』学習研究社、1983 年。

・中野徹『展開写真による　中国の文様』平凡社、1985 年。

・周燕麗・片野考志『中国文様辞典』河出書房新社、1991 年。

・内田千鶴子『宇宙を目指した北斎』日本経済出版社、2011 年。

・赤坂憲雄『方法としての境界』新曜社、1991 年。

・山田康弘『老人と子供の考古学』吉川弘文館、2014 年。
・瀬木慎一『日本美術　読み解き辞典』里文出版、2002 年。
・藤澤衛彦『日本伝説研究　第八巻』すばる書房、1978 年。
・福田アジオ『日本民俗大辞典　上』吉川弘文館、1999 年。

図版出典

・小布施市北斎館 HP
http://hokusai-kan.com/（閲覧日：2015/12/28）
・山口県立萩美術館浦上記念館 HP
http://www.hum.pref.yamaguchi.lg.jp/（閲覧日：2015/12/28）
・東京国立博物館 HP
http://www.tnm.jp/（閲覧日：2015/12/28）
・慶應義塾大学図書館 HP
http://project.lib.keio.ac.jp/（閲覧日：2016/02/11）
・墨田区 HP
http://www.city.sumida.lg.jp/bunka_kanko/katusika_hokusai/hokusai_gallery/mini_gallery.html（閲覧日：2016/02/11）
・菊花検索
http://ja.kikka.org/（閲覧日：2016/02/11）
・古典籍閲覧ポータルデータベース検索　北斎漫画
http://www.dh-jac.net/db1/books/results.php?f4=北斎漫画&enter=portal
（閲覧日：2016/02/11）
・古典籍閲覧ポータルデータベース検索　羅針盤
http://www.dh-jac.net/db1/books/results.php?f4=羅針盤&enter=portal
（閲覧日：2016/02/11）
・エドゥアール・マネ　≪笛を吹く少年≫検索
http://image.search.yahoo.co.jp/search?p=エドゥアール・マネ≪笛を吹く少年≫
（閲覧日：2017/01/12）